

戒律の伝承と浄土思想の一考察

五十嵐 隆 幸

一 はじめに

仏教思想の実践道の大綱として戒・定・慧の三字がある。これは証を得ようとする衆生の修学で戒―定―慧として順次に配列されている。また教・行・証の体系は、仏が説いた教え、その教えに従って衆生が努める修行、その行によって得られるさとりを証という。浄土思想には安心・起行・作業がその体系にある。しかし安心と起行とは頻繁に取り上げられ主張されているが、作業の姿が現今あまり見受けられない。そこで戒と律との関係を踏まえてこの作業を見て、さらに現代社会と共有する点を考察して行きたい。

二 仏教思想の教判から浄土思想へ

永観は『往生拾因』で「若得『信精進』自具『念定慧』。念佛是念。一心是定。厭_レ穢欣_レ淨即是智慧。五根既立。豈留六道乎。〔一〕」とあるように、五根の中で信と進とを踏まえた上で、念・定・慧を具足するとし「戒・定・慧」を考慮して特に「念・定・慧」を強調し、さらにこの後で念仏の一行は既に四修を説いて

いる点も取り上げている。また西山派西谷義の行観は『観経序分義私記』において、

戒おほろげハ是小縁ナリとは、戒は「授く」といいて「説く」といわず。ただ「誦し伝うる」ばかりなり。ゆえに

受戒の分は、「目連の来たり授くるに不足なし」という意を釈するなり。(中略)望下欲ス積善増高ニシテ

擬三上資コトヲ来業ニ(《禁父縁》第六段)とは、これは父王のいまだ自力の位を引かえたる色を示すこ

となり。かくのごとく逆罪の難に値あいて、すでに諸経の位には漏れつ。いまだこの経の《正宗(分)》

の位には到らず。《序(分)》の中間に居して、しかも昔の自力随縁の起行をもって、六賊煩惱に値あ

て合戦したる雑毒・雑善の位にて浄土の機を發起する色を示すことなり。この心地をもって、望下欲ス

積善増高ニシテ擬三上資コトヲ来業ニと釈するなり。それにとつて二つの意あり。一には、目連がの神通力

にて来たりて戒法を授けたるが、すなわちこれ慈悲起行の徳なり。二には、富楼那は来たりて王のた

めに法を説きて王の心を開發する、これ知慧の法門なり。定・慧の二法は悲・智の二門なるべし。こ

れすなわちまず自力随縁の功徳をもって、浄土の機を發起する助成となりて、浄土の法門を縁起する

作法次第なりと云。^②(筆者述べ書き)

として、まず戒は説くのではなく伝えるのである。そして定は伝えたる慈悲起行、さらに慧は法を説く智

慧で浄土の法門を縁起する作法次第としている。さらに行観は『観経玄義分私記』で、「この経(『観経』)

が、教・行・証を立せず見説一同の義を開きて、所説の位に極楽を見る。佛をも見て観佛三昧の義あるゆ

えに得益すと説くを、これというは、教を聞く位に願行具足して往生するゆえに他力往生というなり。こ

れを、末法之遺跡ゆいしやくといいて、人寿十歳の時にもこの経がが留まりて、聞く人みな往生すべし。^③(筆者

述べ書き)として教えを聞いて願行具足し他力往生のさと(証)に至る「教・願・証」と解釈している。

この点について證空は『玄義分他筆鈔』において善導の心として、

今師ノ心ハ教外ニ行、証ヲ立テズ。教位即チ行、証ナリ。依リテ、所詮ノ念佛ヲ即チ弥陀教ト立テ給フナリ。問ヒテ云ク、教即証ナル、其ノ心如何。答ヘテ云ク、諸教ハ簡機ノ行ナルガ故ニ、必ズ教ヲ受ケテ行ジテ其ノ上ニ証ヲ得ト習フナリ。今師ノ心ハ、弘願ノ一行ハ簡機ノ行ニアラズ、佛体即チ衆生往生ノ行ナリ。此ノ謂ヲ聞キテ即チ往生ヲ得。此ノ聞ノ外ニ全ク行ヲ用キル事ナシ。此ノ謂顯ハシテ衆生ニ願心ヲ発サシム。故ニ、教ト云フ。教即願ナリ。願即佛体ナリ。佛体即往生ナリ。依リテ、教ノ位ニテ証ヲ得レバ、諸教ノ教、行、証ト共ニ同ジ、トハ心得ベカラズ。(4)

とあるように教・行・証と三立、順進するのではなく、教が即ち行であり、証であると説き明かしている。聞によって証から願行へと衆生に願心を発させることを教とし、内含された行や証を立てず、念仏を弥陀教と立てている。

三 安心・起行・作業

浄土思想の実践面の網格としては安心・起行・作業がある。證空は『往生礼讃自筆鈔』で「安心、起行、作業、ニ付キテ、マサシキ要法ヲ選ビ出セト問フナリ。答ノ中ニ、マヅ安心ヲ答フル事ハ、起行、作業ハ安心ニ依リテ成ズベキ故ニ、必ズ往生セント思ハバ、觀經、ニ依リテ、具^ニ三^心一^ヲ、ト云フナリ。世、出世ノ事皆心ノ所作ナリ。生死流動ノ心止ミテ、浄土ニ心安ンゼバ、實ニ往生疑フベカラザル故ナリ。(5)」と、起行・作業はまず清浄なる国土へ安心往生によって成すべきことであり、次に起行・作業はこの「具三心」に対して仏恩報謝として進み、例えば国土を清浄にすることである。したがって安心・起行・作業

を横一列の正行ではなく、ここでは安心を重要とし、これを踏えた上の起行・作業で基盤進化の関係がある。

安心とは衆生が浄土への往生を弥陀に願われた際に念仏を称える時に具えるべき三種類の心を安心といひ、善導の『往生礼讃』に「必欲生彼國土者。如觀經說者。具三心必得往生。何等爲三。」^⑥として、至誠心・深心・回向発願心の三心を挙げてゐる。

次に起行とは『往生礼讃』に「如天親淨土論云。若有願生彼國者。勸修五念門。五門若具定得往生。」^⑦として天親の『淨土論』に説かれている礼拝・讚歎・作願・觀察・回向の五念門を挙げてゐるが、善導は『觀經疏』散善義において、この五念門の作願門と回向門とは三心の回向発願心に同ずるものであり、むしろ讚歎門に讚歎称揚と讚歎称名との二義があるのでここから称名正行を独立させ、さらに称名浄土の功德を説いた經典を読む必要があることから読誦正行を加え、觀察正行、礼拝正行、そして先の讚歎に供養を合わせて讚歎供養正行とし五種正行としたものと考えられる。

また五種正行のうち、称名正行が『無量寿經』の第十八願における正定業であることを明確にし、前三後一の四種正行は正定業を資助する行であり、往生を願う衆生の心を励ますという意味で助業と名づけられている。このように浄土往生を願う衆生が実践すべき行を起行という。

そして作業とはその中に定められている方規・標準であり、どのような態度で実践するかなどの規定がある。この点から作業は仏教における出家者の規律としての「律」、逆に起行はさとりを求めるために自身を戒めるものとして仏から教えていただいた「戒」（授戒）に相応し、起行と作業との関係は戒・律ではないか。これは證空が『散善義自筆鈔』で念仏によって帰せられる五念と第一の念仏からなる六念を説いたさいに、

三福ニ合スル文、見ツベシ。三、修行六念、ヲ積スル中ニ、所謂念仏法僧、トイハ、念仏、念法、念僧ノ三念ナリ。念戒捨天等、トイハ、念戒、念施、念天ノ三念ナリ。施ト、捨、トハ、言異ニシテ、心同ジ。前後ノ三念合スレバ、六念、ナリ。是ヲ、化教ノ六念ト云フ。律ノ中ニ、毎日ノ晨朝ニ、月ノ大、小等ヲ念ズル制教ノ六念ニハ同ジカラズ。知ルベシ。⁸⁾
とあるように、『觀經』三輩散善の六念を修行六念と言い「化教ノ六念」とし、律の中にある「制教ノ六念」ではないと名義している。これは『往生礼讃自筆鈔』において次のように述べている。

諸衆等、今日晨朝、各誦六念、トイハ、僧ハ必ズ律ヲ學ビテ戒ヲタモチ、佛教ニ順ジテ佛家ニ住ズベシ。佛家ニ住スル類、六念ヲ誦シテ三業ヲ守ルベキモノナリ。故ニ、今ノ行者ヲ勸メテ、六念ヲ誦セシムルナリ。ココニハ、六念、トイハ、仏教ノ六念ニアラズ、是、制教ノ六念ヲ指スナリ。云ク、一ニハ月ノ大小ヲ念ズ。(中略)二ニハ食處ヲ知念ス。(中略)三ニハ受戒ノ時夏臘ヲ念ズ。(中略)四ニハ衣鉢ノ有無ヲ念知スルナリ。(中略)五ニハ同別食ヲ念知ス。(中略)六ニハ康羸ヲ念知ス。(中略)此ノ六ノ事ヲ念ジテ佛ノ教ニ隨ヒ、戒法ヲ守ルベキ故ニ、今ノ諸衆晨朝毎ニ各六念ヲ誦スベシ、ト云フナリ。⁹⁾

これは日々の生活における仏の教に随い、戒法を守るための規律であるとし、「制教ノ六念」のことである。仏・法・僧の三宝の「僧」は修行している僧団の姿を敬うことである。しかし時代と共に「戒」と「律」とが一体化し「戒律」というように、浄土の「起行」の中に「作業」が含まれ、道徳的な四修作業が顕れず、安心と起行が強調されているように思われる。本来、作業は安心や起行を上げまし、相續させていくものである。

四 作業（四修）

四修は修習といい、基本的には印度において仏道を志す行者のあるべき修行のすがたとして説かれている。『撰大乘論釈』第八（世親釈、真諦訳）には「論に曰く、無量無数百千俱胝大劫中に由り、数数の修習に依ると。積して曰く、この文は三慧には四種の修を具すべきことを顕わす。（中略）小劫にあらざるが故に大という。これすなわち長時修を明かす。数数の修習とはすなわち無間・恭敬・無余の三修を顕わす^{〔10〕}」（筆者述べ書き）とある。また『俱舍論』二十七には「一つには無余修、福德と智慧との二種の資糧、修して遺すこと無きが故に。二つには長時修、三大劫阿僧企耶を経て、修して倦むことなきが故に。三つには無間修、精勤勇猛に刹那刹那に修して廃することなきが故に。四つには尊重修、所学を恭敬して顧惜するところなく、修して慢ることなきが故に^{〔11〕}」（筆者述べ書き）とあるように論書に説かれる四修は、仏道を志す修行者が無量の時間をかけて休むことなく修行を努め、これを余すところなく完成しようとする行者修道のすがたを顕している。

さて作業としての四修は善導が浄土教における修行の軌則とした。①長時修・②恭敬修・③無余修・④無間修の四つをいい、浄土宗の教義体系では、念仏の称し方やその態度が規定となってくる。まず②恭敬修とは尊敬し大切な態度をもって修すること。次に③無余修とは他の行を交えないこと。さらに④無間修とは他の行によって間断させないこと。そして①長時修とは②から④の三修を一生継続けることを意味している。

聖道行者のための修行法を浄土教に取り入れて衆生の修法として編作しているのが、善導の『往生礼讃』と慈恩大師基の『西方要決』^{〔12〕}である。『往生礼讃』前序に、

一者恭敬修。所謂恭敬禮拜三拜ス彼ノ佛及ヒ彼ノ一切ノ聖衆等ヲ。故ニ名ク恭敬修ト。畢命ヲ爲レテ期ト。誓テ不_二中止_一。即チ是レ長時修ナリ。二者無餘修。所謂專ラ稱ニテ彼ノ佛名ヲ。專ニ念專ニ想專ニ禮專ニ讚ス彼ノ佛及ヒ一切ノ聖衆等ヲ。不_レ雜_二餘業_一。故ニ名ク無餘修ト。畢命ヲ爲レテ期ト。誓テ不_二中止_一。即是レ長時修ナリ。三者無間修。所謂相續シテ恭敬禮拜。稱名讚歎。憶念觀察。回向發願。心心相續シテ不_下以_二餘業_一來_レ間_上。故ニ名ク無間修ト。又_不下_二以_二貪瞋煩惱_一來_レ間_上。隨犯隨懺シテ。不_レ令_二シメ隔_レ念_一。隔_レ時_一。隔_レ日_一。常ニ使_二ムルヲ清淨_一ナラ。亦名ク無間修ト。畢命ヲ爲レテ期ト。誓テ不_二中止_一。即是レ長時修ナリ。(13)

とある。一つには恭敬修で、いわゆる仏および一切の聖衆などを恭敬し礼拝する。そして依正二報の論理から別々の法を礼するのではなく、すべてを礼すべきだとしている。二つには無余修で、専ら彼の仏の名を称えて、彼の仏および一切の聖衆などを専念し專想、專礼、專讚して余業をまじえない。無余の修から専らの修として「專修」という要語もこの関係から生じたと考えられる。三つには無間修で、相續して恭敬礼拝し、称名讚歎し、憶念觀察し、回向發願する。無間とは相續ということ得心々に相續して余業によって間断せず、また貧瞋煩惱から來し隔てず、隨犯隨懺して一々に懺悔することで、念、時、日を隔てず常に清淨ならしめることである。さらにこれら三修のそれぞれに誓って中止せず、長時修とあることから、これら三種の態度を一生涯継続するとしている。

『往生礼讚』では安心・起行・作業という体系が示され、四修法は安心の三心、起行の五念門を策勵する行法として位置づけられている。衆生に適した、あるいは衆生にも可能な修法に改められており、特に無余修は他の行をまじえないといい、專修念仏の根源をなすものである。

法然は『選択集』九に「念仏の行者、四修の法を行用すべきの文」と題して、『往生礼讚』と『西方要決』の釈をそのまま挙げている。その私積段では、この二つの引文の通りであるとし、さらに『往生礼讚』

が三修しか挙げていないことについて、四修とは①長時修、②愍重修、③無余修、④無間修であり、初めの長時修は、後の三修すべてに共通する修し方である。例えば愍重の行をもし中途で止めてしまえば愍重修（恭敬修）としての意義にならないのであり、また無余修や無間修の二修も生涯続けなければそれぞれ修法として成立しない。『往生礼讃』で三修の下で「畢命爲期。誓不中止。即是長時修。」⁽¹⁴⁾と、命おわるまで誓って中途で止めない、といっているのはその意味である。

證空は四修のひとつ「恭敬」と『涅槃經』などで説かれる「仏性」について『序分義自筆鈔』において、先づ、身業ヲ積スル中ニ、恭敬、トイハ、総ジテ衆生ノ仏性ヲ敬フ事ヲ明ス。其ノ性一ナルガ故ニ、最モ敬フベシ。マドヒノ法ノ自是非他深キニハ同ゼザルベシ。供養、トイハ、既ニ敬フ謂アレバ、飲食、衣服等ノ四事、百味悉ク施シテ、恭敬ノ相ヲ顕スベシ。礼拝、ト云フハ、既ニ衣食ヲ譲リテ供養シツレバ、身業礼拝スベシ。不輕菩薩ノ礼拝ノ如シ。⁽¹⁵⁾

と「一切衆生悉有仏性」を重要とし最敬としている。さらにはこの仏性を「迎送来去、ト云フハ、律ノ作法、客僧来レバ是ヲ迎へ、去レバ立チテ是ヲ送ル。此ノ儀ニ准ヘテ、僧ノヒトリ然ルベキニアラズ、仏性ノ理ヲ備へタル謂、一切衆生ニ於テ、必ズ来ランヲ送り、去ランヲ迎フベシト定ムルナリ。」⁽¹⁶⁾として律の作法としての来客へ対応の喩えから論じている。また明秀は『愚要鈔』において、

上ノ安心ヲ以テ行スル時。往生ノ起行トハナルソト云テ。五門既具スレハ定得往生。一一門與上三心合。隨起業行不問多少。皆名眞實業ト釋シ玉ヘリ。次ニ四修者恭敬修・無餘修・無間修・長時修也。是レ往生ノ作業也。即上ノ安心起行ノ體ニ於テ。愍重ノ志ヲ盡シテ。刹那モ餘念ナク間斷ナク。畢命迄ナシトグルヲ作業ト云フ。是又前ノ茶ヲ立ル喩ノ如シ。即チ茶ハ安心ノ體也。立ルハ起行也。然レバ此茶ヲ立ルニ付テ。先叮嚀ノ志ヲ也スハ恭敬修ノ義也。茶ヲ立ルノミニ意ヲ入ルルハ無餘修ノ義也。

少モ意ヲヤスメザルハ無間修ノ義也。鹽梅口味ヲ等分ニ立テトグルハ長時修ノ義也。今是モ願力所成ノ往生ノ體ヲ。自ノ心中ニ證シ納メテ持ヌレハ。ヤガテ恭敬懇重ノ志ヲ以テ。畢命ノ時ニ至ルマテ。聊モ餘念ナク退轉ナク。此證得往生ノ體ヲ憶念シ稱禮スルヲ。親近憶念不斷無間ト成シタル他力ノ四修トハ云ヘリ。故ニ此時正ク安心・起行・作業一致ニ極リテ。速ニ無生ヲ證スル位ヲ。行四修法用。策三心五念之行。速得往生ト釋シ玉ヘリ。¹⁷

として「四修」は御茶を立てる態度の喩え説明している。そして安心・起行・作業が一致一体となって速得往生することを顕示している。四修が現代社会においては、しつけ・作法・マナー・ルールに相応すると思われる。平成二十一年八月二十九日に京大時計台記念館で「京都からの提言 これからの社会のために」というフォーラムが行われた。子どもにモラルを伝えようとして四点がまとめられ、京都新聞にも記載されていた。この社会のための作法と、浄土の作業としての四修と共通する点があるように思われる。

《安心》御茶の葉

《起行》御茶を立てること

《作業》御茶を立てるに對して

《子どもにモラルを伝えよう》

- ② 恭敬修 御茶を立てることに丁寧な志をなす。 ① 人に親切にする。
- ③ 無餘修 御茶を立てることだけに心を込める。 ② うそをつかない。
- ④ 無間修 御茶を立てることに少しも思いを費かない。 ③ 法を犯さない。
- ① 長時修 御茶に塩や梅の味を入れないように続ける ④ 勉強をする

ヨーロッパでは社会に出る前の勉強で「パブリック・スクール」という規則的な社会ルールを身につける期間があり、中国では大学生は全寮制である。また日本でも社会人として通用するように平成二十三年

度から職業指導（キャリアガイダンス）を盛り込むこととなった。

法然は称名念仏に対して諸行余善と対照的に解釈したり、また称名念仏と諸行余善とを横に配列するのではなく、往生は念仏を踏まえた上で諸行余善を行わずのことを顕示し堅立している。そして後生のために念仏は正定業であるがこれで往生できるのだから充分だと思ひ込み、戒を授き伝えることなく、慈悲を行うこともなく、また悪業へ執り行うことのないように、法然自らも『選択集』撰述後にその依頼者である九条兼実の妻のために授戒を行っている。

現実生活を過ごす上では念仏の障りとなるものはすべて廃捨するのが必要であるが、現実生活を守って行くために称名念仏がそこなわれることのないため、その上に戒が執り行われたのではないか。そしてこれが機縁となって念仏に対する態度、専修念仏へと導かれる意味があったと考えられる。

五 日本仏教の体系

新仏教と旧仏教、あるいは正統仏教と異端仏教という二者対立的論点は、鎌倉新仏教の側から天台・真言などを旧仏教とし、逆に天台・真言など顕密仏教（正統仏教）の側から鎌倉新仏教を異様極端だといひ異端仏教と、それぞれの立場を中心に置いて解釈している。

鎌倉初期において南都・天台・真言など顕密仏教は、確かに平安仏教を基盤とし、諸宗兼学を顕示して鎌倉仏教が作成されたのであるから「正統仏教」である。そして浄土、禅、日蓮などは諸宗兼学した正統仏教（顕密仏教）を基盤とし、専修・選択して進化、発展したのであるから異端仏教ではなくまさに「新

仏教」である。したがって新仏教と旧仏教、あるいは正統仏教と異端仏教のように二者対立の関係（横）ではなく、正統仏教と新仏教とは、根源基盤と進化発展との関係（縦）にあると解釈ができる。

そして新仏教の特徴として、専修・選択ということが挙げられる。確かに法然の称名念仏、道元の只管打座、日蓮の唱題は、いずれも専修の傾向を持ったものである。法然は称名念仏を根拠とし、道元が宋代の禅を受け、日蓮が伝統的な天台教学を中心にその基盤としている。

法然は『選択集』で教相判釈の論理に基づいて称名念仏を説き示している。第一章では、道綽によって仏教を大きく聖道門と浄土門に分けて、聖道門を捨てて浄土門に入り、第二章では浄土門の中でも正行と雑行に分け、さらに正行の中で正定業と助業に分け、最終的には正定業である称名念仏一行に絞って行くというものである。それが後に日蓮によって「捨・閉・閣・抛」と指摘されて厳しい批判を浴びることになる。しかしこの『選択集』でも第一章で『安楽集』を引用し一切衆生はすべて仏性を有しているとし、第八章で『観経』の至誠心、深心、回向発願心の三心を発起すれば即便ち往生することを採り上げていることなどが見受けられる。また授戒師であることから念仏と戒とは二元的ではなく、念戒一致として専修を示している。そして源信『往生要集』を見て善導『観経疏』玄義分を知り、『選択集』撰述の根拠となる『観経疏』全巻を宇治の経蔵で発見したといわれている。このような観点から天台との関係が少なからず認知できる。

そして法然門下では、聖道門諸宗からの批判に承えて、このような法然の厳しい選択・専修を緩めて、聖道門や諸行を何らかの形で認め入る新たな理論構成を形成することとなった。長西の諸行本願説、弁長の諸行往生の立場は、法然の選択・専修説を制限することによって、聖道門や諸行を承認している。幸西や隆寛、また親鸞は諸行や自力念仏は真実報土ではなく、方便化土に生じる化土・辺地説による諸行の方

便として認めて行くのである。そして證空は行門・觀門・弘願の体系の上に立った聖道門の承認で、聖道門そのままでは認められないが、弥陀の本願（弘願）に帰した上は、諸行も釈迦の説かれた教えであり、仏恩報謝として自然に行われる觀門開會そして開合、和合の思想である。

六 まとめ

以上のように鎌倉時代は何らかの形で顕密仏教（正統仏教）を導入し、これを展開させて、新仏教を形成している。そしてまた異端が先導することによって新文化が生じるのである。日本文化は華道、茶道、香道などと言われるように「道」の言葉が用いられている。仏教も「仏之教」（仏）「仏即教」（法）「成仏教」（僧）と言われ、この三宝のひとつ僧宝は修行者の「すがた」を敬うことである。したがってこの修行道から仏教も「仏道」ともいえる。そしてこの行道は教に包摂されている。新仏教は勢力が弱くても異端ではなく正統仏教（顕密仏教）を基盤として進展し、時代に相応した仏教であり、後に勢力を著しく拡大し、室町・江戸時代の日本仏教へ引導して行くのである。ここに対立するのではなく共生であり、共に生きるのにひとつの仏道としての律というのものが必要である。そしてこのような「仏教の道」を後の世代に伝承して行かなければならない。

註

(1) 『大正』八四・九二頁下。

- (2) 『西全』別巻七・七七〜八二頁。
- (3) 『西全』別巻六・六〇〇頁。
- (4) 『西叢』五・四七頁下〜四八頁上。
- (5) 『西叢』三・六頁上。
- (6) 『大正』四七・四三八頁下。
- (7) 『大正』四七・四三八頁下。
- (8) 『西叢』二・二〇六頁上。
- (9) 『西叢』三・五八頁下〜五九頁下。
- (10) 『大正』三一・二〇九頁上。
- (11) 『大正』二九・四一頁下。
- (12) 『西方要決』の第十四では全般に極樂往生を願うものの日々の生活規範が具体的に示されている。特に恭敬修と無間修の説述が詳しく、恭敬修では①有縁の聖人、②有縁の像教、③有縁の善知識、④同縁の伴、⑤三宝の五種を示している(『大正』四七・一〇九頁中〜一一〇頁上)。
- (13) 『大正』四七・四三九頁上。
- (14) 『大正』四七・四三九頁上。
- (15) 『西叢』一・二三〇頁下。
- (16) 『西叢』一・二三〇頁下〜二三一頁上。
- (17) 『大正』八三・五四四頁下。

